

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03134

研究課題名（和文）日治時代・台湾南方澳の高知県漁民等の「移民村」より見た近代黒潮流域圏交流史の特質

研究課題名（英文）CHARACTERISTICS OF MODERN HISTORY OF SOCIAL AND CULTURAL EXCHANGE IN KUROSHIO REGION IN THE LIGHT OF IMMIGRANT FISHERS VILLAGE IN NANFANG-AO, TAIWAN DURING THE JAPANESE RULE

研究代表者

吉尾 寛 (Yoshio, Hiroshi)

高知大学・その他部局等(名誉教授)・名誉教授

研究者番号：40158390

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀前半日本統治時代の台湾においては、総督府を中心に官営漁業移住事業が複数回実施された。その中で1920年代からは、高知県等からの漁業移住者が台湾宜蘭県南方澳漁港において総督府が構えた集合住宅に住み、その地区は「移民村」と呼ばれた。本研究は、文献上で「村」の位置を大まかに推定できたのを機に、「村」を中心とする当該漁業移住者の漁労の実態、家族の生活空間を可能な限り「復元」（生業、生活、習慣等に関わる場所の確定、当事者の生活意識等々）したものである。またこの作業を通して、高知県、台湾の近現代史に新たな側面を加えるとともに、「近代黒潮流域圏交流史」の枠組みの有効性を示すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、20世紀前半の片や高知県近現代史、片や台湾東北部（宜蘭県）の同時代史が、漁業、移民をテーマに互いに繋がる歴史的過程を実証的に示すことができた。またこの作業の成果を打ち出す中で、研究の枠組みとしての「黒潮流域圏」は、「環境史」の学界において国際的に認知される一歩を踏み出した。それとともに、本研究組織の活動は、高知県西南部、台湾東北部（宜蘭県南方澳）の地方史研究者の学術的関心を刺激しただけでなく、その枠組み「黒潮流域圏（交流）」自体も又、今後の日本、台湾の実際の交流を地方のレベル（高知県西南地区、愛媛県同地区と台湾東北地区）で推し進めていく役割を担い得る社会的意義も見出された。

研究成果の概要（英文）：In Taiwan during the early 20th century under the Japanese rule, the Office of the Governor-General of Taiwan conducted multiple official emigration recruitments of Japanese fishers. From the 1920s, emigrant fishers from Kochi and other prefectures settled in collective housing set up by the Office in Nanfang-ao port, Yilan County, Taiwan, and the area was called as “immigration village”. First, the actual locations of the immigration village were estimated based on a literature review. Then, focusing on the immigration village, the fishing activities of the immigrants and the living spaces of their family members, including places related to livelihood, daily life activities, customs, and life consciousness, were reconstructed as much as possible. This research adds a new dimension to the modern and contemporary history of Kochi Prefecture and Taiwan and demonstrates the validity of the framework of the “modern history of social and cultural exchange in the Kuroshio region”.

研究分野：黒潮流域圏における人的交流の人文社会科学的考察

キーワード：黒潮 台湾 高知 漁業 移住 植民地 南方澳 宜蘭

## 1. 研究開始当初の背景

台湾において黒潮の「恐怖の海」のイメージは、日治時期以降、水産業特に鯉漁業振興のための重要なキーワードに変わっていった。台湾の鯉漁業について資料を調査する中、当時宜蘭県南方澳には高知県等の四国・九州の漁民が移住し、当地の漁業に従事していた事実を見出すに至った。しかし、従前高知県近代史において海外移住は、専ら南米、南洋方面の話題に終わっており、本県民の台湾への移住、しかも漁民のそれはこれまで殆ど注目されてこなかった。

## 2. 研究の目的

事前調査で、高知県等の漁業移住者の内官営移住者は基本的に南方澳漁港に台湾総督府が構えた集合住宅に住み、日本・台湾総督府側はその地区を「移民村」と呼称したことがわかった。本研究は、研究代表者が文献上で「村」位置をほぼ推定できたのを機に、「村」を中心とする当該漁業移住者家族の生活空間の「復元」(生業、生活、習慣等に関わる場所の確定、当事者の生活意識等々)を目的とし、更にその実証的作業を通して、高知県の近現代史の新たな側面を加えるとともに、「近代黒潮流域圏交流史」の特質の一端に迫ろうとするものである。

## 3. 研究の方法

(1) 文献調査：当該官営漁業移住者の内、延べ人数において最も多く且つ(季節漁で渡来する者を除き)長期に移住した高知県の当事者に関して、片や台湾側の一次史料(総督府文書、宜蘭県に公蔵されている地方文書等々)、片やその移住民を送り出した高知県側の関係文書(高知県水産会発行の雑誌等々)を収集して、両方の史実を整理(すり合わせ又接合)していった。特に高知県、台湾側の文書から初期の移住者の氏名等が確認され、それが以下の聞き取り調査の有力な手がかりとなった。

(2) 聞き取り調査：(高知県側)当県近代史研究会を初め県内の関係地区の郷土史研究会に協力を仰ぎ、(本研究を立ち上げた当時)県内に在住する当該移住者の当事者、家族やその遺族・親族の所在を調べ出し、その方々に対して聞き取り調査(漁労、加工業等の生業、家族生活、児童の学校生活、年中行事等々)を実施し、関係資料の複写物等を収集した。100年近く時間が経って物故者も多かったが、8家族(官営、私営移住(自由移民)関係者)の協力を得ることができた。(台湾側)本研究の台湾側の協力者台湾国立海洋大学教授、宜蘭県史館専門学芸員の工作ネットワークに依って、嘗ての移住地宜蘭県蘇澳鎮南方澳漁港の郷土史家グループ(南方澳商圈発展協会理事長兼南方澳文史工作室・三剛鉄工廠文物館長を中心とする)および宜蘭県史館等の専門学芸員の協力が受けられるようになった。特に三剛鉄工廠文物館長がそれまで調べてきた当該史実・成果の提供を多数受けるにいたった。以上の高知県、台湾南方澳側で得た聞き取り情報の結果を整理(すり合わせ又接合)していった。この過程で、私営移民(自由移民)で当時南方澳で漁労に従事した者とその家族の情報も少なからず得るに至った。

## 4. 研究成果

(1) 上記「3.」で把握した史実、情報を整理した結果、移住民と家族が生業(漁労、魚の加工場等)、生活(娯楽施設、学校関係、信仰等)上で関わりを持った施設等が、当時それが在った地点とともに十数箇所判明した。実際、日本撤退後数回にわたる大きな開発によって、現在の南方澳漁港の景観からは殆ど全く当該移住民の生活の痕跡は認められない。三剛鉄工廠文物館のグループが2000年代以降行ってきた聞き取り調査の結果が大きな力となった。その主要な施設と地点を地図上に示したものを末尾に掲出している。尚、当時共同墓地が設置されたと推察される場所は南方澳でなく大南澳地区であり、又紙幅との関係から、その情報は本報告書に掲載しなかった。研究業績2023年度の卞鳳奎専書を参照されたい。(研究業績〔図書〕2023)

漁労について(官営移住者):高知県高岡郡黒潮町上川口出身の情報提供者は、祖父・祖母、父・母、叔母が1926年に「ナンポー」(当該移住者は南方澳をこう呼ぶ)に来て、孫に当たる自身は1932年に当地で生まれる。本人が物心ついた頃、父は「移民部落」の附近(第一漁港の南、対岸に造船所がある地区)に二軒の家を持ち、その内レンガ建ての家は「兵隊」に貸していた。海側には兵営があった。祖父はすでに「部落」を離れて、第一漁港北側、近くに海水浴場がある地区に家を構えていた。祖父は手広く漁を行い、父親もそこで働いていた。祖父は大きな船を購入し、船は10m以上の長さがあったかもしれないが、ナンポーの船の中では「中ぐらい」の大きさと記憶している。船員が20名、全て日本人であった。旗魚漁、網漁をしていた記憶がある。又他に大きな蟹や、鯛なども捕っていた。父親は銚を使う旗魚漁もやったが、年間通じては、鯖、鯉、鯛、鯛などを網漁していた記憶がある。その漁の特徴は「行っては帰り行っては帰る」ものであった。「こぶり」(小釣)漁という言葉聞いたことがある。母親は鯉節工場で働き、その腕前が評価された。別の情報提供者の話では、雇っていた人に(潜って銚を打つ)沖縄の人も居り、引き揚げ時に船を彼らに譲った、と。

漁労について(私営移住者(自由移民)の多様なあり方):私営移住者は、官営移住者とは反対の、第一漁港の北側、魚市場の近くに多く住んでいたと推定された。:情報提供者の父親は、

「大きな船に乗れる」( = 船の運転士になることができる ) 「乙一」の資格を持ち、突棒漁の時期になると日本人の船に雇われて働いた。しかし自分でも船を持って祖父と一緒に鰹など一本釣り、曳縄漁を行なう。その時は人を雇わなかった。 / 祖父は漁師でなく「漁業指導員」( 情報提供者の孫の記憶 ) としてナンポーに渡った。台湾の人を「船頭」として船に乗せ、指導にあたった。周りには沖縄出身の季節労働者が沢山居た。また旗魚、珊瑚の話をよく祖父から聞かされた。当時現地の人が銚子で魚を突く漁をし、日本人が来てから延縄漁が始まったという話を聞いている。 / 父は、郷里土佐清水から出て山口県の大手会社で「ポンポン蒸気」( 焼玉エンジン ) の技術者として長く働いていた。日本がディーゼルの漁船に変わっていく中、父はナンポーに赴き「やきだま」船の指導に当たった。従って、船を持たず、魚を捕って帰ることはなかった。

生活と戦時下について( 官・私営移住者 ) : 原住民(「生蕃」) が山から物を持って降りて来ることもあり、「母」が「きちんと」買い取っていた。町には映画館があり、親が日本の時代劇を見に連れて行ってくれた。毎年行われる金刀比羅神社の祭と旗魚神輿が楽しみで、神輿を父親が担いだ。 / ある年米軍の小型爆撃機を「兵隊さん」が大砲で撃ち落とされた。その数日後米軍による空襲があった。多くの「兵隊さん」が亡くなり、顔の無い死体が魚市場に数多く並べられた、今でも忘れられない。 / 蘇澳の学校に行く途中で米軍の飛行機に爆撃された。一緒に歩いていた友達が目の前で亡くなった、今も言葉に話さない。

学童の生活について( 官・私営移住者 ) : 南方澳の官・私営の移住漁民の子供は、1、2年まで南方澳の「分教場」で勉強し3年生に上がると蘇澳の駅近くに在った「蘇澳小学校」に通うようになる。家に帰ると南方澳の海水浴場で泳ぐことが楽しみで、毎年冬には「蘇澳の金比羅神社」の前の浜から南方澳の海水浴場の間を遠泳し、多くの見物人が出た。ただし、当該移住者の学童が当時現地の子どもと交流したという話は、南方澳の情報提供者からも現時点では聞かれない。

日本の敗戦と引き揚げについて( 官営移住者 ) : 日本が敗戦すると( 敗戦のことは通っていた蘇澳国民小学校で知る ) 状況は一変し、集合住宅では「台湾人」( 実際にどのような階層なのか不明 ) が水道管を破壊しようとして、自分の母は懸命に抵抗した。その時やって来たアメリカの進駐軍が止めさせたという。ただ、移住家族に雇われていた女性(「クーニャン」と呼ぶ)に暫く匿われ、いよいよ当地を離れる時には食べ物を貰ったことを今でも思い出す、と。私営移住者( 漁労従事者 ) は集まって蘇澳市街地( 或いは蘇澳神社付近 ) に小屋を建てて住んだという。

情報提供者の多くの話によれば、高知県移住者は官・私営を問わず、所謂引き揚げを境に「ナンポーの豊かで幸せ」な生活から、一気に日本の故郷で壮絶な極貧の生活に陥った。主な原因は家督を兄弟等に譲って渡台していたことにあったと推察される。

戦後の暮らしと活動 : 「蘇澳国民小学校」で学んだ子どもたちは、それぞれ苦労の果てに安定した生活を獲得すようになると( 調査の中では一家のみ長く漁業を営む ) 1980年代同窓会組織「蘇澳会」が立ち上がる。このことをきっかけに南方澳を再訪した者もあった。

## (2) 当該移住問題並びに「黒潮流域圏」という枠組みに対する社会の理解の深まり

「黒潮流域圏」という枠組みは、2008年高知大学大学院( 現黒潮流域圏総合科学専攻 ) の教員の発想から誕生したもので、黒潮の影響を受けている東南アジアから日本までを、自然科学、人文社会科学等の分野から総合的に捉える枠組みであった。本研究期間においてこの枠組みは、それまでの高知大学と関係大学の交流の範囲から、国際的な「環境史」学界においても認知されていく一歩を踏み出した。2021年9月吉尾寛と本研究分担者の堀美菜は招聘に応じて「The Sixth Biennial Conference of East Asian Environmental History」のRoundtable(Asian and Oceanian environmental history in the future Asian pluralism and environmental diversity under the influences of the Pacific Ocean) ( 研究業績 [ 学会発表 2021 ] ) で「黒潮流域圏」の枠組みについて解説した。

他方、当該移住問題は現在の関係地区でも認知されるようになった。先ず、高知県内の移住者の家族・関係者への聞き取り調査を通じ、土佐清水をはじめ関係地区の郷土史会に当該問題は徐々に知られるようになり、地元新聞『高知新聞』が記事にして取り上げた(2020年10月24日朝刊第1面、2021年10月19日同第23面)。このことがきっかけとなり情報提供者が増えた。

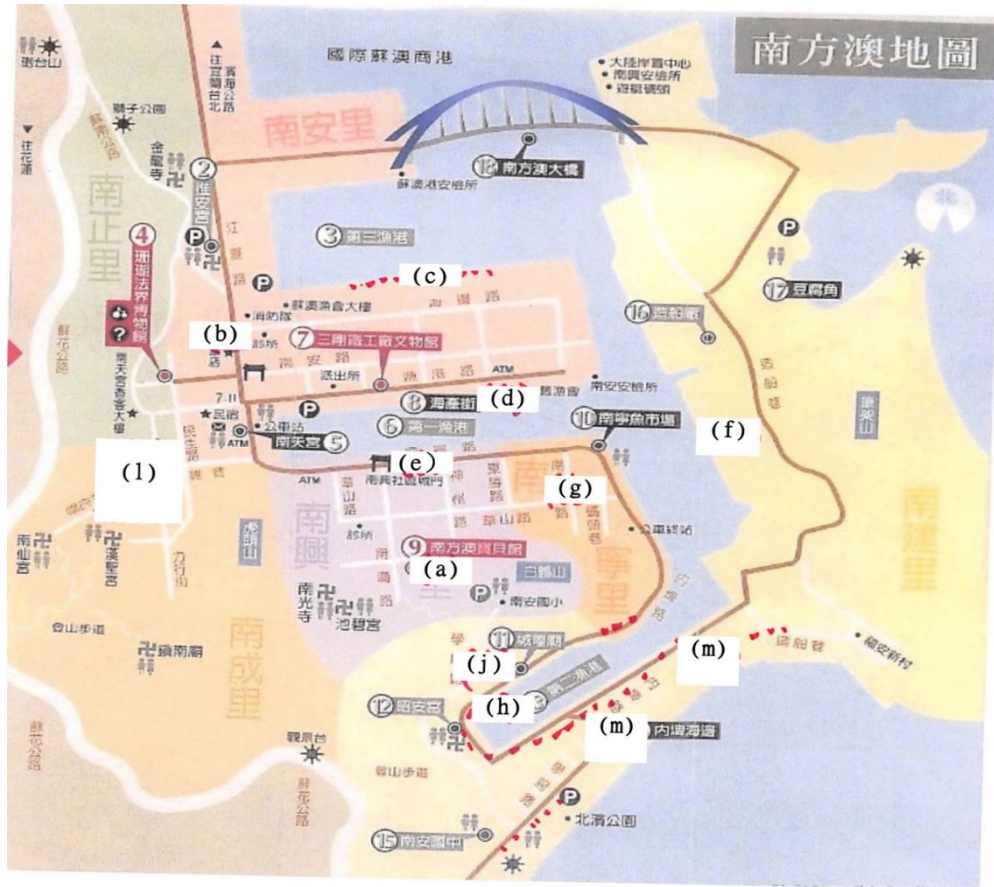
移民の主要な出身地であった高知県土佐清水市では、早くから当地郷土史会がこの問題に関心を寄せ(2017年吉尾講演)、『新土佐清水市史』の編纂においては新規項目の一つに「黒潮がつないだ台湾への移住」を設けてその事実を収録し(吉尾寛執筆) 2023年に刊行した。

台湾の南方澳並びに宜蘭県の側でも当該移住問題について関心が高まった。特に地元の歴史文書館「宜蘭縣史館」はその学術雑誌『宜蘭文獻雜誌』に吉尾の旧稿(2019)を翻訳し、更に日本で入手できない資料を追加して発表した。研究交流は現在も続いている。

かくして、2021年宜蘭県文化局は南方澳開港100周年を記念して国際学術シンポジウム「2021南方澳漁港百周年国際学術研討會」を開催(2021年9月10・11日 蘭陽博物館)。吉尾を講演者の一人として招聘し、オンラインで当該移住問題について報告させただけでなく、本会議において「黒潮流域圏」を意識した新たな交流を期して、土佐清水市長、愛媛県宇和島市長もオンラインで開会式で祝辞を述べた。

蘇澳市街地

(11)  
(9)



(a)「移民村」(官營漁業移住者集合住宅) (b) 戲院(映画館) (c) 海水浴場、(d) 魚市場、(e) 鯉節工場、(f) 造船所、(g) 兵營(正式名稱不明) (h) 沖繩漁業移住者居住地區、(i) 金比羅神社、(j) 日本西國八十八か所仏像(和歌山県青岸渡寺・如意輪觀音像) (k) 蘇澳尋常小學校(國民小學校) (l) 女子青年訓練所(兼蘇澳小學校南方澳分教場)?、(m) 防空壕

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉尾寛	4. 巻 58
2. 論文標題 明治末期・高知県野根村漁民の台湾宜蘭庁蘇澳への官営移住をめぐる幾つかの問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 海南史学	6. 最初と最後の頁 26, 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉尾寛	4. 巻 122
2. 論文標題 映し入戦前移居地の高知縣漁民生活 以黒潮連結的台灣・南方澳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宜蘭文獻雜誌	6. 最初と最後の頁 90,107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 松浦章	4. 巻 88
2. 論文標題 日本統治時代の台湾産カジキマグロの大連への輸出	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南島史学	6. 最初と最後の頁 16,30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦章	4. 巻 68-1
2. 論文標題 日本統治時代台湾産鮮魚の海外搬出	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西大学 文学論集	6. 最初と最後の頁 35, 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 卜鳳奎	4. 巻 86
2. 論文標題 日本統治時代台湾の漁業発展に寄与した日本籍漁業移民と知識人	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南島史学	6. 最初と最後の頁 124, 147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦章	4. 巻 85
2. 論文標題 日本統治時代台湾の漁業と日本人 鯉漁業を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 南島史学	6. 最初と最後の頁 27, 42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Hiroshi Yoshio, Mina Hori
2. 発表標題 Asian and Oceanian environmental history in the future Asian pluralism and environmental diversity under the influences of the Pacific Ocean
3. 学会等名 The Sixth Biennial Conference of East Asian Environmental History (Roundtable) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉尾寛
2. 発表標題 黒潮流域圏史中二戦前高知縣漁民移居南方澳
3. 学会等名 宜蘭県立蘭陽博物館 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉尾寛
2. 発表標題 日治時代・台湾南方澳への漁業移住（基調報告を兼ねて）
3. 学会等名 2020年度社会経済史学会 中国四国部会高知大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉尾寛
2. 発表標題 日治時代・台湾南方澳への高知県漁民の移住をめぐる諸問題 築港前・後の移住事業の違いに焦点をあて
3. 学会等名 2019年度高知海南史学会大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉尾寛、堀美菜、松浦章
2. 発表標題 CHARACTERISTICS OF MODERN HISTORY OF SOCIAL AND CULTURAL EXCHANGE IN KUROSHIO REGION- IN THE LIGHT OF IMMIGRANT FISHERS VILLAGE IN NANFANG-AO, TAIWAN DURING THE JAPANESE RULE
3. 学会等名 黒潮圏科学シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉尾寛
2. 発表標題 日治時代・台湾南方澳の高知県漁民等の「移民村」-黒潮流域圏交流史との関係に留意して
3. 学会等名 2017年度土佐清水市郷土史同好会・3月例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松浦章
2. 発表標題 日本統治時代台湾の漁業と日本人 鯉漁業を中心に
3. 学会等名 第46回南島史学会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 吉尾寛	4. 発行年 2021年
2. 出版社 宜蘭県立蘭陽博物館	5. 総ページ数 439
3. 書名 2021南方澳漁港百週年: 黑潮流域圏史中二戰前高知縣漁民移居南方澳	

1. 著者名 吉尾寛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 (台湾) 博揚文化事業公司	5. 総ページ数 126
3. 書名 海流與移民: 從黑潮流域圏の觀點看東亞海域世界史 (海洋文化研究專輯第二輯)	

1. 著者名 松浦章	4. 発行年 2020年
2. 出版社 (台湾) 博揚文化事業公司	5. 総ページ数 226
3. 書名 近代臺灣與東亞海域船舶航運史之研究 (海洋文化研究專輯第二輯)	



1. 著者名 高知県立大学文化学部、吉尾寛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 372
3. 書名 大学の高知ガイド	

1. 著者名 松浦章	4. 発行年 2018年
2. 出版社 関西大学出版部	5. 総ページ数 370
3. 書名 天保七年薩摩片浦南京船金全勝号資料	

1. 著者名 卞鳳奎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 (台湾) 博揚文化事業公司	5. 総ページ数 238
3. 書名 日籍官紳在臺灣 (1895-1945)	

1. 著者名 土佐清水市史編さん委員会、吉尾寛	4. 発行年 2024年
2. 出版社 土佐清水市	5. 総ページ数 1172
3. 書名 新土佐清水市史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	堀 美菜 (Hori Mina) (60582476)	高知大学・教育研究部総合科学系黒潮圏科学部門・准教授  (16401)	
研究分担者	松浦 章 (Matsuura Akira) (70121895)	関西大学・東西学術研究所・客員研究員  (34416)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	卞 鳳奎 (Bian Fengkui)	国立台湾海洋大学・海洋文化研究所・教授	
研究協力者	廖 大慶 (Liao Daqing)	南方澳文史工作室三剛工廠文物館・館長	
研究協力者	公文 豪 (Kumon Go)	高知近代史研究会・前会長	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関